

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 22 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520149

研究課題名(和文) 農閑工芸の研究 ―地域資源を活用する造形教育プログラムの構築―

研究課題名(英文) Agricultural Off-season Craft - Creation of an educational program about the practical use of local resources -

研究代表者

宮原 克人 (MIYAHARA, Katsuto)

筑波大学・芸術系・准教授

研究者番号：80400662

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：「農閑工芸」の事例収集と分析、生産地域との人的交流を通じて、芸術の視点による地域資源の発見を試み、「農閑工芸」を活用した造形教育プログラムの構築を目的とした。

これまでの研究から、「農閑工芸」を現代に活用する方法論は明らかになった。それは、調査・分析・ワークショップ・実験制作を有機的に繋げる方法である。そこから汎用性の高い教育コンテンツが生まれた。それらを活用する「木材造形論」を2013年度に筑波大学において開講した。「農閑工芸」の造形原理を、今後教育の場で活躍する人材へ伝える。

研究成果の概要(英文)：Agricultural Off-season Craft (Noukan Kougei in Japanese) refers to the creation processes for a variety of handicraft works that are done at leisure or during the farming off-season. These items are made for personal use or as wares to be sold. The creation processes utilized do not require complex tools or skills, and are made with local natural materials and simple tools.

By studying these traditional practices it is possible to gain insight on flexible creation methods and techniques that fit into various environments. Hence, agricultural off-season craft was studied, and a workshop was held adopting its concepts and techniques into various art education fields. Then in 2013, a new course (Mokuzai Zoukei Ron in Japanese) which also applies these agricultural off-season craft concepts was started at the University of Tsukuba. The contents of this research are introduced on our home page.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学 芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：農閑工芸 教育 工芸 芸術 美術 地域資源 森林 デザイン

## 1. 研究開始当初の背景

(1)大量生産、大量消費が文化的一面ともなっている現代では、使い捨ての物にあふれ人と物の関係が危うくなってきている。生産効率を求める分業制の生産現場では、素材への深い理解力の喪失とともに、物を作り出す喜びも失われている。比較的生産方法が容易である「農閑工芸」では、原材料の調達、加工から完成まで生産物は生産者の手の内にある。永年にわたる創意と工夫から自然素材の特性に従った柔軟な加工方法が見られる。本研究ではこれらの制作方法から「農閑工芸」の造形原理を明らかにする。日本人が森林と密接に接し、有効に利用しながら生活してきた文化を再認識する場の創出につなげたい。

(2) 筑波大学は総合大学であり芸術専門学群の他、全学を対象とした木工実習を開設している。木材は有史以来、人に使われてきた素材だが、手工具で加工するというシンプルな実習課題において、実材を扱う技術や応用力、想像力の不足が受講者からうかがえる。教育現場において安易な教材が氾濫していることもその一因かもしれない。素材を深く理解し、素材の特性を生かした「農閑工芸」の手法を取り入れることは、現在の教育の場においてもなお有効であると考えた。

## 2. 研究の目的

(1)主として農業を生業とする人々が、農閑期の現金収入のために行われてきた「農閑工芸」が、日本各地で作られている理由のひとつに、生産方法が容易である事があげられる。もちろん樹種の選定方法、加工技術等には専門的な知識と技術が必要とされるが、他の制作方法と比較し大型の設備等の必要性は少ない。この生産方法が容易であるという事が本研究を進める上で重要な意味を持ち造形教育への応用が望める。「農閑工芸」を応用した造形教育は、専門的かつ高度な技術の修得に偏らず、自然素材の特性を生かした造形原理の理解につながると考える。事例収集とワークショップから現代へ応用できる教育コンテンツを開発する。

(2) 事例収集や分析では、造形する視点からのアプローチが大切になる。研究代表者は、主として木材、漆等の自然素材を生かした制作研究を行っているため、新たな造形教育システムの構築に必要な、“作る”視点からの調査、分析を行える。事例調査、分析とともに毎年開催するワークショップや実験制作は調査地で実施する。地域との人的交流から活発な意見交換を行い「農閑工芸」をキーワードとした地域資源の再発見を試みる。

## 3. 研究の方法

「農閑工芸」の定義・事例収集と分析を行い、

研究の枠組みを明らかにした上で、「農閑工芸」の造形原理を活用した造形教育コンテンツの開発を行う。ワークショップ、実験制作、展覧会を実施し、客観的な評価を得ながら妥当性の検証を行った。

### (1) 事例収集と分析

日本各地に点在する「農閑工芸」の生産地から、現在も様々な「農閑工芸」が見られる福島県会津地方を中心に調査した。技術者の制作方法を詳細に調査し、博物館、資料館から情報収集を行った。

### (2) ワークショップ

「農閑工芸」の生産地や筑波大学において、教育への応用を念頭に置いたワークショップを行った。また、「農閑工芸」の手法から、地域資源の再発見を試みた。

### (3) 発表

毎年、展覧会や国際コンペディションにおいて本研究の成果を発表し、評価を得ながら研究の方向を定めた。

## 4. 研究成果

「農閑工芸」の事例収集と分析、生産地域との人的交流を通じて、芸術の視点による地域資源の発見を試み、「農閑工芸」を活用した造形教育プログラムの構築を目的とした。主な成果発表は以下の通りである。

(1) 「農閑工芸」の造形原理を探求する作品発表を行った。

① 「un-secret base」 TOKYO DESIGNERS WEEK (以下、TDW), 2011年

「作ること、そのものに価値がある」という農閑工芸のひとつの定義から、作る喜びを直接的に感じられる表現・方法を考えた。枝とインシュロックのみの簡単な作り方を採用した結果、行為が直接造形となるため、グループワークでありながら、それぞれが積極的に関与できた。



② 「記憶の記録」筑波大学, 2011年

農閑工芸では身近な自然の資源を用いる。そこで、大学周りの植物を採取し、素材を造形素材として扱う他、手を加えることによって素材の持つ意味自体を変化させ、農閑工芸の

解釈の枠を広げる制作実験から作品を作り  
展覧会を行った。



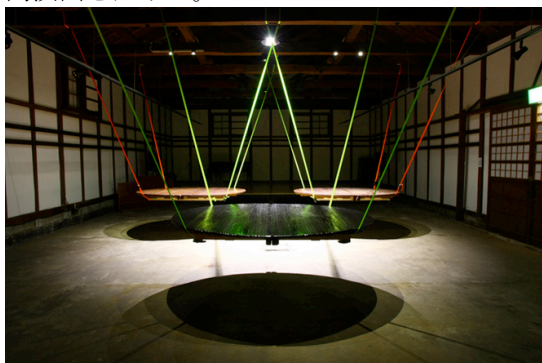
(2) 「農閑工芸」の事例調査と分析からワーク  
ショップを重ね、地域との人的交流から活  
発な意見交換を行い「農閑工芸」をキーワ  
ードとした地域資源の再発見を試み、発表した。

① 「PLAY MEAL」会津・漆の芸術祭, 2012年  
地域にある既存のもの固定概念を払拭す  
るワークショップを行い、物や物、物や人、  
人や人などにおいて有機的な関係が生まれ、  
地域文化の再発見に繋がった。



② 「地の食・地の器」喜多方・夢・アートプ  
ロジェクト, 2013年

①の「PLAY MEAL」での活動から、地域資源  
の活用方法について具体的にまとめ、ポス  
ター展示を行うとともに、蔵の空間におい  
て、インスタレーションと食のイベントを行  
った。これまで各地で行ってきたワーク  
ショップから、地域資源を活用する造形  
手法として、仮に形をとどめる、ロープ、  
ラジエーター、クランプ、インシュロック  
等の使用が有効だと分かった。あらかじ  
めそれらを用意して、地域にある資源「  
ありもの」を有効に使った空間演出を試  
みた。



(3) 「農閑工芸」の実践的教育コンテンツ。  
ホウキグサの種蒔きから刈り取り、道具から  
箒の制作までを実践的に行う教育内容を「  
つくばのほうき」としてまとめ、「TDW 2013」  
の ASIA AWARDS「学校作品展」に出展し入選  
(国内外 54 校 65 チームの出展があり作品総  
数 229 作品の中 8 作品が入選) を果たした。



(4) 教育コンテンツの開発

これまでの研究から、「農閑工芸」を現代に  
活用する方法論は明らかになった。それは、  
調査・分析・ワークショップ・実験制作を有  
機的に繋げる方法である。そこからいくつ  
かの造形原理を導きだした。「農閑工芸」  
は、実材を扱うもの作りであるが、「農閑  
工芸」の造形原理をもとに、講義等でも実  
践可能な汎用性の高い教育コンテンツを作  
った。そして、それらを活用する「木材造  
形論」を 2013 年度に筑波大学において開  
講した。

(5) 本研究を社会へ還元する活動も行った。  
島根県地域づくりアドバイザーとして石見  
銀山周辺の竹林活用について農閑工芸の  
事例紹介とアドバイスを行った (2012 年)。  
また、講演「農閑工芸プロジェクト」(福  
島芸術計画×Art support Tohoku-Tokyo  
までの心プロジェクトⅡ, 2012 年) を行  
った。

(6) 調査・ワークショップの事例と共に汎  
用性の高い教育コンテンツをまとめ、ホ  
ムページを作成し公開した。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 5 件)

1. 宮原克人、つくばのほうき、TOKYO  
DESIGNERSWEEK 2013 ASIA AWARDS、2013  
年 10 月 26 日～11 月 4 日、明治神宮外苑  
絵画館前 (東京都新宿区)

2. 宮原克人、地の食・地の器、喜多方・  
夢・アートプロジェクト、2013 年 11 月  
8 日～11 月 11 日、大和川酒造北方風土  
館 (福島県喜多方市)

[その他]  
ホームページ等  
<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~miyaharalab/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮原 克人 (MIYAHARA, Katsuto)

筑波大学・芸術系・准教授

研究者番号：80400662